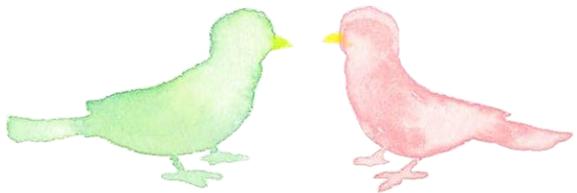


富江

○育児書に羽子板写真貼りし日よ  
寒稽古竹刀打ち合う豆剣士  
日時計の刻指す影は寒の昼

美貴

○独り居の余白ばかりの寒さかな  
哀しけりや啼けよと一声寒鴉  
スクランブルエッグふはふは寒卵



弘

○十分に老いて噎せおり寒の水  
寒灯のひとつに帰るあたたかし  
二ヶ月やピタゴラスイッチ転げだす

えり

樋の水歌うて走り里寒し  
冬銀河奥土佐白く洗ひをり  
蠟梅の蜜酒飲むや鳥数羽

○寒雲や冷蔵庫の中は空

樹

千代

○待春や色鉛筆を尖らせて  
○寒星や形見の手編みカーディガン  
○切株の百の年輪寒月光

文子

○牡蠣数多鳴無神社船着き場  
寒の薔薇蕾のままの日を重ね  
お正月帰っていいかと子は聞けり

農子

甲高い声の響や寒稽古  
寒禽やもつと緩りと鳴き渡り  
知らぬ間に新築の家寒椿

丞子

○寒梅や大正生まれの母の顔  
○家路へと寒夕焼の橋渡り  
天風や南国土佐に寒波来る

夕子

○こころもちマスクの下の寒の紅  
自粛にも飽きて真紅の寒の紅  
寒の水何はさておき手を洗ふ

郁子

○寒月や細きヒールの音高し  
寒風を捉え洋上鳶の舞  
塵置場ずるい番人寒鴉

さえ

庭前の雪駄に止まり春の鳥  
長靴の狭き土間なり冬の鍋  
初鍋の宿に自慢の桜風呂

富子

○睦月なれど集えぬ世にて紅をひく  
蠟梅に全て託して後は黙  
寒紅やこころ作っていざゆかん

味元 昭次 作品

二度鳴くは明日のために寒鴉  
三寒の菅氏四温の池江璃花子  
寒卵置き残生を噛み締むる

